

プログラム・ノート

太田峰夫

スメタナ：弦楽四重奏曲第1番 ホ短調「わが生涯より」

今年生誕200周年を迎えるチェコ国民楽派の祖ベドジフ・スメタナ(1824～84)は生涯に弦楽四重奏曲を2曲書いているが、第1番は連作交響詩『わが祖国』とほぼ同時期の、1876年の作品だ。

タイトルにある通り、本作は自叙伝としての性格を持つ。ベルリオーズヤリストの標題音楽からの影響は明らかだが、より直接的には作曲家自身の梅毒の発症と聴覚の喪失が作品の構想にかかわっている。以下、彼が知人に送った手紙も参考にしながら、作品の内容を確認しておこう。

第1楽章はホ短調。冒頭の主要主題は「人生の戦いに身を投じよという運命の声」を表す。転調を経て「若かりし頃の芸術への愛」、ないし「はっきりと名付けられないものへのあこがれ」を表す副次主題が登場。その後はおおむねソナタ形式の枠組みを守りつつ展開していく。**第2楽章**はヘ長調、ABAB形式。ポルカを書いて暮した青春時代を描く。庶民的な主部(A)ではラッパの模倣を聞ける。**第3楽章**は変イ長調、3部形式。「[やがて最初の妻となる]少女への初恋」を描く。**第4楽章**はホ長調、ソナタ形式。「[作曲家としての]自身の成果に対するよろこび」が最高潮に達したところで一転、「鋭い耳鳴り」、および第1楽章の「運命の声」が響き渡る。第1楽章副次主題、第4楽章副次主題の回想とともに、曲は静かに閉じられる。

エネスク：弦楽八重奏曲 ハ長調 作品7 より 第3楽章、第4楽章

弦楽八重奏曲はルーマニアの作曲家ジョルジュ・エネスク(1881～1955)が18歳から19歳にかけての時期に書いた作品である。リストやフランクの循環主題の技法を取り込んだこの本作について彼自身は晩年に以下のように述べている。「『弦楽八重奏曲』でわたしは構成の問題とたたかった。4つの楽章をつなげることで、各楽章の自律性を重んじつつ、総体としては非常に拡大された、一つの大きなソナタ楽章をなすようなものを書きたかった。[...]はじめて川に吊り橋をかける技師でも、自分が[本作を]五線譜に書きつけたときほどの恐ろしさを感じなかっただろう。」

全曲は中断なしに演奏するように書かれているが、本日は後半にあたる第3、4楽章を演奏する。**第3楽章**は3拍子の緩徐楽章。声部が絡み合い、クライマックスに達した後、付点音形の第1楽章主要主題が回想される。やがてトレモロを背景に、半音階で上行する主題が奏でられるが、これは第2楽章に由来している。**第4楽章**はワルツ楽章だが、作品全体の「再現部」の役目も兼ねている。前述の第2楽章の主題、第1楽章主要主題、同副次主題が次々とあらわれ、折り重なるように展開。第3楽章の主題の回想を経て、最後はハ長調で力強く閉じられる。